

ムサリンダ（ムチャリンダ）竜王

山形洋一

ミャンマーのお寺の境内で、瞑想にふける仏陀をとぐろの上に乗せ、赤い目で世間をにらむ緑色のコブラ像をよく見かけます。そのコブラはムチャリンダ（ビルマ語で「ムサリンダ」）という名の竜王（サンスクリット語でナーガ・ラージャ）なのです。

「竜王」と言えば、わが国では鎌倉幕府第二代将軍・源実朝の有名な歌があります。

時により 過ぐるは民の 嘆きなり。 八大竜王 雨やめたまへ！

雨を降らせる力のある「八大竜王」信仰はインドから伝わったもので、竜王らの名は、ナンダ、ウパナンダ、ワシュキツ、トクシャカ、アナバダッタ、マナシ、ウハツラ。まるで落語の「寿限無（じゅげむ）」のようですが、ムチャリンダの名はそこにありません。つまりムチャリンダは「大竜王」ではなく、地方の池や川を守る「中小竜王」の一人なのです。

ここで私は「一匹」ではなく「一人」と書きましたが、竜族はその神通力で人の姿にもなれると信じられ、古代インドの彫刻では蛇の形だけでなく、人の形をした像も作られてきました。

蛇形の像では3、5、7と奇数の頭がもち、ただのコブラではないことを示しています。人の姿をしていても、その頭の上に肋骨を広げたコブラの頭がやはり奇数覆いかぶさる形をとります。仏典ではこれを竜蓋（りゅうがい）と呼んでいます。

ムチャリンダ竜王と仏陀の関係について、『ラリタ・ヴィスタラ』というお経に、次のように書かれています。

ゴータマ・シッダルタがボダイジュの下で悟りを開かれ「如来」となられたあとも、すぐには結跏趺坐（けっかふざ、組んだ脚）を解かず、一週間その悟りの境地を楽しまれました。第二週に如来は三千大千世界を散歩され、第三週には「悟りの場」を瞬きせず見つめられ、第四週には東の海から西の海まで「短い」散歩をされて悪魔の娘たちの誘惑を退けられました。

そうして第五週目、竜王ムチャリンダの家に住まわれたのですが、天气が荒れて大暴風となりました。そこでムチャリンダ竜王はとぐろを巻いて如来（ブツダ）の周りを囲み、さらに東西南北からも竜王たちがやってきて、七日七夜、如来をお守りしました。

ミャンマーを含め、東南アジアの図像では、竜王はムチャリンダのとぐろのうゑに如来を乗

せ、肋骨をひろげた「龍蓋」をその上に差しかけています。ミャンマーの竜蓋は頭ひとつですが、古代カンボジアのものは多頭です。アンコール・トム逸品が、上野の東京国立博物館に常設展示されているので、ぜひいちどご覧になってください。竜蓋の七つの頭のうち右側の三つが欠けていますが、残りはほぼ完全です（図1）。

この像でとくに感心するのは、とぐろが上から見て円形ではなく、あぐらを組んだお釈迦様の下半身を支えるように、三角形に巻いていることです。また胴の断面も円形でなく、ニシキヘビのように不定形でリアルです。鱗がこまかく彫られていますが、絵では省略しました。とにかくクメール美術の徹底した写実性には驚かされます。



図1 カンボジア、アンコール・トム出土、ムチャリンダ竜王上のブツダ坐像。東京国立博物館所蔵

ムチャリダ竜王像のうち世界最古と思われるものが、中部インドのサーンチーの大塔（世界遺産）の西門の南の柱に彫られています。竜王は人間の王者の姿で、その顔はサーンチー彫刻の特徴であるふっくらした童顔。頭の上を5頭の竜蓋が覆っています。これが作られた西暦紀元前後にはまだ仏像は作られず、竜王の上にあるブッダを象徴しています（図2）。



竜王の周りにはトップレスの竜女（ナーギニー）たちですが、手にはそれぞれ楽器を持っています。壺を持っているのが一人いますが、これも楽器として叩いているのでしょうか。そのうしろ姿を見ると、蛇の胴が尻尾のように生え、その先が頭ひとつの竜蓋になっています。くねくねと踊る人の動きにつれて、竜蓋もゆらゆら揺れるのでしょう。ちょっとあやしい光景ですね。

（了）

図 2. 中部インドサーンチーの第一仏塔西門に刻まれたムチャリダ竜王と、楽器を奏でる竜女たちの浮彫り

参考文献：溝口史郎訳『ブッダの境涯 Lalita Vistara』東方出版、1996.